

大阪民衆史研究会報

2025年8月号
第32巻第7号
(通巻358号)

発行 大阪民衆史研究会 (代表 林 耕二)

E-mail: osaka.minshushi@gmail.com (オーサカ ドット ミンシューシ)

例会のお知らせ

◇9月例会

日時 9月21日(日)13時半開場、14時開会

会場 大阪府教育会館3F蘭の間 報告 小林義孝さん(本会会員)

「考古学者・喜谷美宣、その学問のなりたち」

1950～60年代の考古学をめぐる状況の中戦後民主主義を信念とする喜谷氏の考古学がどのように形成されたか考える。その時期生み出された遺跡の「記録保存体制」、破壊するものに費用を負担させ記録のみは残すという体制、喜谷氏もその体制が形成されるなか模索し苦慮された。報告者もその体制下、文化財行政にかかわり考古学を勉強してきたが、半世紀がすぎてその体制は機能不全を起こしつつあり、それを担う行政内研究者も遺跡の保護や保存との緊張感を失っている。現在は再度考古学と遺跡の保存を考える時期がきている。その作業の一環として戦後の考古学を作り上げ遺跡の保護に全力を尽くし苦悩した喜谷美宣さんの考古学を総括してみたいと考える。

◇10月例会

日時 10月19日(日)13時半開場、14時開会

会場 大阪府教育会館3F蘭の間

報告 中條健志さん(本会会員・神戸大学大学院文化科学研究科講師)

「『極右の台頭』とは何か？—フランスとベルギーを事例に—」

ヨーロッパにおける「極右の台頭」が叫ばれて久しいが、そうした勢力は何を主張しているのだろうか？その背景としてナショナリズムや排外主義の高まりが語られる一方で、極右政党の「脱悪魔化」とよばれる穏健化路線への転換も指摘されている。

日本の報道では「移民」や「外国人」、「難民」と結び付けられることが多いこの問題について、本報告では、国民連合(フランス)とフラームス・ベランフ(ベルギー)の主張を読み解きながら、「台頭」の要因を明らかにする。

参加費 会員400円 非会員500円

DVD版 『大阪民衆研究会会報(保存版)Version.5』発売中 定価1000円

<1994年8月(創刊号)～2024年8月(通巻347号)>申し込みは上記メールで。